
【織斑一夏に憑依か.....せめて強く生きていこう】

とある世界の思春期男子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【織斑一夏に憑依か……せめて強く生きていく】

【Nコード】

N1388Z

【作者名】

とある世界の思春期男子

【あらすじ】

神のミスで死んだ少年がISの世界で主人公に憑依し、強く生きようとしながら生活を送っていく。そんな物語です。

第0話 一つの決意（前書き）

どうも、とある世界の思春期男子です。

なるべく長く続けるよう努力しますので温かい目で見守ってくださいねばと思います。

尚基本駄目文ですので、『ここはこうした方がいい』といったようなアドバイスを下されば嬉しく思います。

第0話 一つの決意

「よく来たのお、お前さん」

今俺の身に起こっている事を有りのまま話そう。
何か知らない間に変な空間にぶっ飛ばされてて
何か変な爺さんが急に眼の前に現れた、以上。

「変なとは何じゃ。失礼な奴じやのう」

人の心を読むなよ爺さん。

変な状況下にいきなり叩きこまれた上に見た目がいかにもどっかの
仙人みたいな変な爺さんに遭遇したとなればパニックを起こして変
な宇宙語喋るかもしれないだろ。

それと心読めるんだったらもう俺喋らなくていいよな？

喋ると俺のゲージがどんどん減っていくからさあ。

「別によいが、ちと年上に対しての敬意が足りんのう。ワシは神
じゃぞ」

初対面の人物に対してあんたもちよつと失礼じゃないのか。
っていうか神様だったらそんな細かいことぐらい見逃せや。
まあ別にそれはいいよ、それよりも聞きたい事があるし。
ここってどこ？ 地獄？

「天国。お主はさっきトラックに轢かれて死んだんじやよ」

ふーん……俺さっき死んだんだ。

そつえば何か記憶の最後にトラックが突っ込んでくる映像がある

な。

うわ、俺頭の中身がザクロみたいに豪快に飛び散ってるし。
こんなグロい映像パソコンでも中々ないんじゃないか。

「ほお……お前は慌てんのじゃのう」

慌てたところで一体何が変わるっていうんだよ。

それに、別に俺自身は死んだ事を後悔なんかしていない。

あの時小さい子供を守るために俺は飛び出してトラックに轢かれた。
でも小さい子供が来てないってことはまだ生きてるってことだ。
それだけでももういいよ。

「それがワシのミスじゃったとしてもか？」

ミス？ 神様でもミスするのか？

まあ別にいいよ、もう俺の件に関してのミスは。

ただこれからはミスに気を付ける事を約束してくれ。

絶対に俺みたいにミスで人を死なせてしまわないと。

「……気にいった。お前に第二の人生を与えてやろう」

いきなりキャラと口調変えてんじゃねえよ爺さん。

ていうか明らかキャラや口調と共にボイスも変えただろ。

声は何のつもりかは知らないがB A S A R Aの織田信長になったたし。

……え、第二の人生だって？

どういうことだよ爺さん、俺を異世界にでも飛ばすのか？

「勘の方も中々鋭いな。ますます気にいった」

だからその第六天魔王のボイス止めてくんない。
本人じゃないと分かってても怖いんだよ。

今日寝た時夢の中に出てきたらどうしてくれるんだよ。

……死んでるから寝る必要も無いか。

「まあ一旦落ち着いて聞け。お前には逝ってほしい世界があるんだ」

真面目に話してくれるのはいいが漢字が違う。

この場合は『逝って』じゃなくて『行つて』だ。
それと俺は落ち着いているぞ。

「そりゃいい。じゃあ言うぞ。お前に行つてほしい世界、それは……」

溜めるな、さつさと言え。

「……………IS。つまりインフィニット・ストラトスの世界だ」

インフィニット・ストラトス。

確か今年の初めぐらいにアニメ化したやつだろ。
でもあれって主人公女垂らしじゃ無かったか？

「女垂らしではないが、朴念仁ではあつたぞ」

出来れば行きたくはないな。

行くんだつたら原作沿いにはするんだろ、嫌でも。
あれちよつとだけ見てたけど死亡率結構高いぞ。

主人公は補正がかかってたから死ななかったが。

「だったらいい方法がある。憑依だ」

憑依って他人の肉体に魂が取りつくってやつか。
話の流れからすると俺が主人公の体に憑依する流れだな。
だったら俺はイエスとは言えない。

「何故？」

だから言っただろ。死亡率が高いって。

それにあの主人公のIS……確か白式だったか？
あれ弱すぎるし、何より主人公に合ってない。

ギブが100だったとしてもテイクは70ぐらいでつりあってない。

「そこは安心しろ。この神の力で何とかしてやる」

どうしてもあんたは俺をISの世界に行かせたいらしいな。

「やってもらいたい事があるからだ」

何をやらせる気だ？

世界征服……いや、あんたの事だから原作ブレイクとか言いそうだ。

「まさかそれまで当てるとは」

合ってるのかよ。

やっぱりお前の事尊敬できないわ。

せいぜい神って立場がすごいと思える程度だ。

「うるさい。……お前にはMSを与えてやる」

我が儘貫き通して拳句の果てにはガンダムをI Sの世界にブチ込むのかよ。

あれとI Sが戦ったら絶対にガンダムが勝つに決まっている。しかしそれだと原作ブレイクよりも世界征服のルートに入るぞ。いいのか？ 一応ブレイクと言えばブレイクだが。

「誰が1数メートル越えのままI Sの世界にブチ込むと言った。確かにM Sをお前ごと送るには送るがちゃんと大ききぐらいは合わせる」

……良かったよ、お前が一応その程度の常識を持ってくれていたことは。

でもこの展開だとあれだろ。

俺が使いたいM Sは選ばせない気だろ？

「何を言っている。くじ引きで決めるに決まっているだろう」

せめて送ってくれる世界もくじ引きで決めさせろや。

後何速効で部下にくじ引きを作らせてんだよ。

自分でやれや、何でもかんでも部下に頼むな。

「うるさい。ほれ、出来たからくじを二枚引け」

二枚？

ガンダムを俺に二機くれるのか？

「サービスだ。お前は本来死ぬべき人間ではなかったのだから」

はいはい、ありがとさん。

取り合えず俺は神様の言う通り二枚のくじを引いた。
さうて、一体どんな機体を書いてあるんだ？

……ストライクフリーダムにダブルオーライザー……
どっちもチート級のヤツじゃないか。

「あゝそのくじ無し。面白くない」

確かに俺以外の奴だったら選ぶそうだがよお。

さすがに面白くないの理由でくび引き無しにするの止めて。
俺今当たり引けたから結構嬉しかったんだよ。

ダブルオーライザー好きだったから嬉しかったんだよ、俺。

「いいから引け！次にまたいいのを引けばいいだろう！」

……頼むからザクとかドムはこないでくれ。

そう念じながらまたくじを二枚引く。

今度は一体何を引いたんだ俺。

……ウイングガンダムゼロに ガンダム……

一応ウイングゼロは主人公機だが…… ガンダム？

そんな機体あったか？俺知らないぞ。

「それはアムロ・レイが乗っていた機体。強いぞ」

だったらいいや。

これで俺はISの世界に行かなきゃいけないんだろ。

朴念仁の主人公に憑依して原作開始しなきゃいけないんだろ。

「待て待て。まだ特典が残っている」

お前はとことん原作を壊したいらしいな。

「そうじゃない。　　ガンダムはニュータイプしか使えない」

だったら憑依した後でも俺をニュータイプにすればいいだろう。
なんでわざわざ止める必要もないのに止めたんだよ。
構ってほしいのか？

「そこまで孤独ではない。　お前、単一仕様能力はどうするつもりだ？」

いらないだろうそんなの。
ガンダムの性能舐めるなよ、しかも主人公機。

「いいから何か言え。　叶えてやる」

って言われても俺は困るんだけどなあ。

正直ウイングゼロは機体があるってことしか知らないし　ガンダムは今知った。

機体は何を重視に作られているかが分からないと始まらない。

……待てよ、これならいけるかもしれない。

なあ神様よ、ウイングゼロと　ガンダムよりも上の機体ってあるか？

「ウイングガンダムゼロならウイングガンダムゼロカスタム。

ガンダムなら？　　ガンダムがあるがそれがどうかしたのか？」

じゃあ単一仕様はそれにしてくれ。

単一仕様を使ったら今言った機体になるように。
あんただったら出来るだろ？

「出来るには出来るがそれでは四機になるぞ」

もうそれぐらいしか思いつかないんだって。
頼むよ神様、最後ぐらい願い聞いてくれや。
そんなに無理な注文してないだろ。

「……まあいい。しておいてやる」

ありがとうさん。

「それじゃあ……逝ってこい！」

ん？ 何か今足元からパカッて音が……

って何で俺の足元だけ穴が空いてんだよコラァッ！！

そしてそのまま落ちぎや ああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああ！

「気を付けて逝ってくるんだぞ」

[illegible]

次に会ったら真つ二つにしてやらアアアアア！！

そして俺の意識は完全に途絶えたとき、チャンチャン。

次に俺が目を覚ました場所、そこは病院。

頭には何やら包帯もわんさか巻かれて点滴も刺されてた。
主人公の記憶を辿っていくと何故病院にいるかその原因が分かった。
小さな子供がトラックに轢かれるのを阻止するために道路に飛び出して子供を守り、代わりに自分がトラックに撥ねられた。
……何故だろう、俺と境遇が全く同じだ。
しかも小さい子供っていうポイントもまた一致している。
ここまでくればもはや嫌がらせの域だな。

「……一夏、目を覚ましたのか」

色々としョッキングな事があって気がつかなかったがこの人がいた。
世界最強と主人公の姉っていうのは覚えてるんだけど名前が出てこない。

っていつか主人公の名前って一夏っていうのか。

「……俺って一体何があったんですか？」

一応分からないという風に聞いておこう。
俺は自分が事故で轢かれたという事実を知っている。
ならばここは記憶喪失と言うのが一番いい。

……この人には悲しみを与えてしまっただけだな。

「お前は道路に飛び出した子供を庇ってトラックに撥ねられたんだ。
医者の話では思ったよりも怪我が酷くなかったから数日もすれば退院できるらしい」

「そうですか。ところで、一つ聞いてもいいですか？」

「何をだ？　そもそも一夏、何故今日はそんなに他人行儀なんだ？」

「あの……俺、あなたのことが誰なのかが分からないんですけど」

その言葉が放たれた瞬間確実に俺達の空気が死んだ。

この表現は間違っではない、今、確実に死んだ。

彼女にとってはショックが大きすぎたのだろう。

目を大きく見開いたまま固まってしまっている。

……やばい、罪悪感がかなり湧いてきた。

「う、嘘だよな一夏。冗談……だよな」

「すみません。本気であなたが誰なのかが分からないんです」

申し訳ないといった顔をして謝る。

俺はこの人から一つの宝を奪ってしまった。

何よりもその事実が俺の全身に重くのしかかる。

「あ、でもこれだけは分かります」

「……………何がだ？」

「何故かは分かりませんが今の俺にとってあなたはとても大切に思えるんです。何か……家族のような強くて温かな温もりが」

その言葉を聞いた瞬間主人公の姉は俺に抱きついて泣きだした。

大声だけは上げずに噛み殺していたが、それでも小さな嗚咽は漏れている。

その綺麗に整った顔の頬に涙が伝うのが見えた。

……生きよう、織斑一夏の分まで。

せめてこの人を安心させられるような強い人間になろう。

それが今の俺に出来る償いだと思えるのだから。
俺はこの時、心にそう強く誓った。

第1話 訓練前（前書き）

多分10〜15話ぐらいまでは原作前の話になるかと。
気長に見てもらえれば光栄です。

第1話 訓練前

俺がISの世界に憑依してから一週間が経過した。

肉体の方はもう全然問題が無いらしく今日退院。

今は千冬姉さんと一夏の自宅に向かっている最中だ。

彼女がそう呼べと言ってくれたから千冬姉さんと呼ばせてもらっている。

ちなみに俺の事は見事に記憶喪失という判断が下された。

何種類か治療みたいなのを受けたがもちろん結果はしれている。

リハビリなんかも行っではみたものの結果はやはり変わらない。

当たり前だ、記憶なんか端から無くなっていない。

俺が織斑一夏の肉体や精神を乗っ取ってしまったのが原因なのだから。

医者からももう二度と記憶は戻らないかもしれないと言われて、千冬姉さんが涙を流しているのを見た時なんか自殺しようかとも一瞬考えてしまった。

しかしそれは絶対に許されない選択。

たとえ強制だろうが何だろうが俺は織斑一夏の人生を奪ってしまった。

そして千冬姉さんをひどく悲しませてしまっている。

これは今更換える事の出来ない事実だ。

だったら俺はひたすらに強く毎日を生きなければならぬ。

千冬姉さんが安心してくれるぐらいたくましく生きなければならぬ。

それが今の俺に出来る唯一の事だから。

「一夏、着いたぞ」

「え……あ、すみません千冬姉さん」

「……辛いかな？」

無理やり笑っているような顔で尋ねられた。

その瞳は赤く腫れており瞼のところにもうつすらと隈がある。かなり疲れがたまっているのか顔もかなりやつれているのが分かった。

……もうこんなに無理をさせてしまっているのか、俺は。罪悪感で押しつぶされそうになりながら必死に返答を考える。

でもいい返答が思い浮かんでこない。

下手な事を言って千冬姉さんを悲しませたくない。

そう考えれば考えるほど答えが無くなっていく。

……いや、違う。答えが出てこないんじゃない。

俺が答える事を無意識の内に恐れてしまっているんだ。

無意識の内に悲しませたくないと思って返答を恐れてしまっているんだ。

何か言わなくてはいけないと思いつながらも言えない。

我ながら少し泣きそうになってしまう。

「いえ……千冬姉さんの方がもっと辛いはずですよ」

結局そう返すのが精いっぱい。

千冬姉さんは何も言わずに手招き。

どうやらもう家の中に入ろうというサインらしい。

これ以上迷惑をかけたくない俺は素直に従う。

そして、一夏の自宅に入った。

初めてこの家に入ったというのに妙な懐かしさを感じる。

やはり肉体が自然とそう感じ取っているのだろう。

しかし肉体が懐かしいと感じれば感じるほど罪悪感が増していく。

……ダメだ、今からこんなに弱気では。

「……………」

「……………」

お互いの間に言葉が生まれない。

この状態では仕方ないものがあるかもしれない。

「すみません千冬姉さん。自分の部屋に行ってもいいですか？」

「……ああ。二階に上がってすぐの所だから分かるはずだ」

「有難うございます。それと、少し寝てください。疲れてるはずです」

「……そうさせてもらう」

それ以上の会話が行われる事は無かった。
どうすればいいのかが分からない。
ただただ俺は一人になりたかった。

このままだと千冬姉さんの前で泣いてしまいかねないからだった。

一夏の部屋の中に入るとベッドに仰向けで倒れ込む。

別に眠るわけではない。これからある人物に話があるのだ。

「……爺さん、聞いているんだろう」

『バツチリだ。そして何か用か?』

「単刀直入に聞く。ガンダムはどこにある?」

『お前の目の前にある机の引き出しの中に入っている』

爺さんの言葉通り二つのペンダントが引き出しの中に。

多分赤い方がウイングガンダムで白い方がガンダムだな。

「俺の体はもうニュータイプになっているのか?」

『当たり前だ』

らしい。

しかしこれはかえって好都合だ。

今の俺にはどうしてもしなければならぬ事があるからな。

「あんたに折り入って頼みがある」

『何だ？』

「この家の地下に今から俺の訓練のための場所を作ってくれ。もちろん完全に音が漏れないようにするのと壁は絶対に壊れないようにするのも忘れないで。それと常に俺の使用していない機体が相手になって出てくるようにするのと千冬姉さんでも勝てるかどうか分からないようなレベルにしておくのも追加注文だ」

『…………死にたいのか、お前は』

まあ言われるとは思ってたさ。

自分で考えたって今言った事は正常とは思えない、異常だ。

『そんな事をすればどうなるかぐらいお前でも分かるはずだ。確かにやってしまう事は出来るしワシにとってしてみれば容易い注文だ。だがな、もしそれでお前が死んだらどうするつもりだ？』

「……………」

『織斑千冬でも勝てるかどうか分からないようなレベルでしかモガンダム？ 今のお前じゃ一撃を入れることでさえ奇跡に近い。ガンダムの装甲は確かに厚いがガンダム同士なら一撃が致命傷になるのは分かるはず。そうなった場合はお前は勝率どこるか死亡率の方が高いわ』

「……………」

『だから考え直せ。強くなりたいのならまだある程度は強化してやる』

「それじゃあ意味が無いんだよ」

やっぱりこの爺さんは分かっている。

そりゃ確かに下手をすれば死んでしまうかもしれない危険な方法よりも、傷一つなく確実に強さを手に入れられる安全な方法の方が理屈では良いに決まっている。

でもそれじゃあ駄目なんだよ爺さん。

強くなりたいのなら無茶をしても手に入れなければならない物があるんだよ。

「確かにそれも爺さんに頼ってしまえば簡単に出来るだろうさ」

『分かっているのならそうしろ』

「でもそれじゃあ駄目なんだ。ちゃんと戦い方も知っておかないと駄目なんだよ。いざという時のためには絶対にだ」

『何故そこまでこだわる必要性がある？』

「それじゃあ本能や戦いにおいての勘が磨けない」

『本能や戦いにおいての勘……じゃと？』

口調が一瞬戻ったが気にしない。

……そうさ、戦いにおいて本能も重要な武器の一つだ。

「例えば相手が何を狙っているのか、それを気が付いて直前で阻止

できれば少なからず相手の動きというのは止まったり甘くなったりする。そんな隙を一気に付いて叩く事が出来れば一方的に有利な展開に勝負が持ちこめるだろ」

『つまりあれか。知識などは事前の勉強でどうにかなるが、戦闘においてのスキルは実際に訓練しないと得られないものもある……というやつか』

話が分かってくれて大助かりだ。

それが分ければ俺の言った注文もやってくれるであろう。

俺は一切の嘘は言っていないし、今は主人公。

常にトラブルに巻き込まれたりするものだろう。

『……仕方ない。やってやろう』

「すまないな」

そして一瞬辺りが光ったと思えば一枚の手紙が。

すぐに読んでみるとこんな内容が書かれてあった。

『お前の言う通りの物を作った、地下訓練所への入り口はクローゼットの中。それと言っておかなければならない事がある。まずお前が使用する二機の機体にそれぞれの意思を設けた。これで訓練中に死亡するなどの事故は無い。それからお前がそちらの世界に行った影響で多少世界が変わっている。たとえば人物の抱いている思いなどだ。まあ伝える事はこれぐらい。達者でやれよ神より』

「……色々気になるがまあいいや」

俺はとりあえずクローゼットの中にある地下訓練所へ行く事に。
何故クローゼットの中なのかは無視。
別に気にしなければいいだけの話だ。

さて、地下訓練所に着いた事は着いたが驚きのあまり声がでない。
まさかここまでの完成度だとは思ってもみなかったからだ。

広さは大体横幅が500メートル、縦幅が20メートルぐらい。
ちなみにここでは受けた傷の八割が自動回復するらしい。
ホントにすごいと思うよ、神の力。

「それじゃあ早速訓練開始だ。　来い、『ウイングガンダムゼロ』」

俺の呼び声に反応して一瞬で全身装甲が構築される。

俺が今装備したMSは赤を主体とし、黄色や青といったカラーが翼の部分などに使用されていて色鮮やかな全身装甲の機体『ガンダムウイングゼロ』

もちろん頭の部分も装着してはいるがちゃんと見える。

『ようマスター。　俺がウイングゼロだ』

「いきなりハスキーな声で自己紹介か。 まあよろしく」

『おう。 ……おい、 ガンダムも自己紹介しろよ』

『私が ガンダムです。 これからはよろしくお願いします、 マスター』

こちらは急に俺の前に現れた ガンダム。
カラーは白を主体として所々に黒などがある。
どっちの色もバランスが取れてて綺麗だ。

「…… よ、 お前の中ってどうなってる？」

『マスターが入っていないので空洞ですがどうかしましたか？』

「どうしようゼロ。 突っ込みたいのにスルーされそう」

『ほっとけばいいんじゃないか？』

らしいのでスルーすることにした。

しかしいつまでも喋っている訳にもいかないとため始める事に。

……今の俺でどこまでやれるか。

それが取り合えず今気になる事だな。

ちなみに戦闘は次回に持ち越し。

第1話 訓練前（後書き）

次回、初戦闘です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1388z/>

【織斑一夏に憑依か.....せめて強く生きていこう】

2011年12月5日18時59分発行